

令和6年度

学力向上プラン（後期）



上尾市立大石小学校

目 次

上尾市立大石小学校 学力向上プラン「グランドデザイン」	1
1 学力調査結果の概要	
（１）上尾市立小・中学校学力調査（令和５年１２月実施）	2
【２～６年：国語、算数】	
（２）全国学力・学習状況調査（令和６年４月実施）	7
【６年：国語、算数】	
（３）埼玉県学力・学習状況調査（令和６年４、５月実施）	8
【４～６年：国語、算数】	
2 学力向上を図る取組	
（１）各教科の授業における取組	10
（２）教育活動全体を通じた取組	16
本校の特色ある取組	
家庭教育との連携	

上尾市立大石小学校 学力向上プラン「グランドデザイン」

学校教育目標

- 考える子
- 思いやりのある子
- がんばる子

学校課題研究主題

「わかった、できたを実感し、自信を育てる算数科の授業づくり」
 -個別最適な学びと協働的な学びの実現を通して-

学力・学習状況調査の結果

R6 全国学力・学習状況調査	R6埼玉県学力・学習状況調査	R5 上尾市立小・中学校学力調査
・国語の平均正答率は、全国を5.3ポイント上回った。 ・「書くこと」の正答率は全国平均よりも6ポイント高く、漢字は、10.4ポイント高い。「人物像を具体的に想像すること」にやや課題がある。 ・算数は、全国を4.6ポイント上回った。 ・どの区分もの正答率が国県平均よりも高かった。「道のりと時間と速さの関係」を言葉や数を用いて記述することには課題がある。 ・評価の観点、問題形式全てで、国の平均を上回った。	・学力レベルの平均は、5・6年生ともに国語算数ともに1段階上昇し、県を上回っている。 ・学習方略と非認知能力については、全て県平均より高いレベルである。 ・国語では、読むことについては正答率が高く、言葉の特徴や使い方については低い傾向が見られた。 ・算数では、学年によって課題がまちまちではあるが、変化と関係については正答率が高かった。	・全学年が全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。特に5年生に日頃の指導の成果が表れている。 ・全教科が全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。特に国語に日頃の指導の成果が表れている。 ・経年比較（同一集団）で見ると、算数の学力にあまり伸びが見られないため、児童が数学的な見方・考え方を働かせる授業を展開すると共に、児童一人ひとりに応じた学習活動を設定し、「わかった」「できた」を実感することができるようにしていく。

本校で身に付けさせる学力

知識及び技能の習得	思考力・判断力・表現力等の育成	学びに向かう力・人間性等の涵養
①漢字や計算などの各教科における基礎的な知識。 ②既習の知識をもとにして、問題を解く技能。	③自分の考えについて、理由を言葉や数を用いて記述する力。 ④資料等を用いて、自分の考えが伝わるように発表・表現する力。	⑤自己効力感（自分への自信、自己肯定感）。 ⑥児童が自ら進んで学習に取り組んでいく素地。

学力向上のための授業改善

知識及び技能の習得	思考力・判断力・表現力等の育成	学びに向かう力・人間性等の涵養
・「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を明確にして授業を行う。 ・児童一人ひとりに応じた学習活動を設定し、「わかった」「できた」を実感させる。（個別最適な学び） ・既習内容、新しく学ぶことを明確にして、児童に興味をもたせた授業を展開する。	・各教科の見方・考え方を働かせる授業を展開する。 ・学習形態を工夫し、児童同士で協働しながら学習に取り組めるようにする。（協働的な学び） ・発問を工夫して授業を展開することで、自分の意見の根拠を明確にさせる。	・児童が互いに認め合える環境をつくり、主体的に自分の意見を伝えられるようにする。 ・学習を振り返り、以降の学習に結び付けることで力を高め、伸ばすことができるようにする。

本校の特色ある取組

- 数学的な見方・考え方を働かせる授業を展開
- 児童が計画・運営する活動「集会活動」
- 児童相互の交流を深め、豊かな心を育む活動「たてわり班活動」
- 多様な集団活動を通して、支え合い、高め合う「児童会・クラブ活動」

家庭教育との連携

- 主体的な家庭学習「チャレンジ学習」と「デジタルドリル」の活用
- 家庭や地域への情報発信
- 学校応援団の充実した活用
- 近隣の幼稚園、保育園、小中学校との連携

1 学力調査結果の概要

(1)上尾市立小・中学校学力調査(令和5年12月実施)

2年(令和6年度3年)【国語】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○知識・技能は目標値を5.9ポイント上回っており、基礎的、基本的な知識・技能が定着している。 ●「書くこと」は、目標値を9.1ポイント下回っており、課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	△	要因分析
	思考・判断・表現	≒	問いを正確に読み取り、それに答える形で、ある程度まとまった文章を書く経験が少ない。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
国語科の重点目標	自分の考えについて、理由を言葉や数を用いて記述する力の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	ことばのがくしゅう	漢字の正しい筆順を理解している。	字形を意識させながら、空書き等を行っていく。
②	文しょうを書く	指定された長さで文章を書いている。	日記などを指定の文字数や行数で書くことを繰り返し経験させる。

2年(令和6年度3年)【算数】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○基礎は目標値を2.2ポイント上回っており、知識・技能が定着している。 ●活用は目標値を3.7ポイント下回っており、特に、「たし算」「長さ・かさ」に課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	問題や計算場面を日常生活と関連付けてイメージすることができていない。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
算数科の重点目標	・基礎基本の内容を活用した応用問題に多く取り組ませる。		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	たし算	10をもとにして、(何十)＋(何十)の計算をしている。	10のまとまりが何個分あるかを確認しながら計算練習をくり返していく。
②	長さ・かさ	1Lを10dlであることを理解し、リットルマスに示されたかさをdlで表すことができる。	具体物を使って、量感をもてるように指導していく。

評価について

△	目標値を上回る
≒	目標値と同程度
▼	目標値を下回る

※目標値とは、学習指導要領に示された内容について、「出題形式」や「解答形式」の特性をもとに、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合を示したものです。

3年(令和6年度4年)【国語】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○知識・技能は目標値を1.7ポイントほど上回っており、基礎的、基本的な知識・技能が定着している。 ●話すこと・聞くことが目標値を4.6ポイント下回っており、課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	語彙力が低いため、話の中心を捉えたり、考えを正しく書き表せない児童が多い。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
国語科の重点目標	自分の考えが伝わるように発表・表現する力の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	話し合いの内ようを聞き取る	話の中心を明確にするための話し手の工夫を捉えている。	友達の発言を他の児童がもう一度説明する場面を設定する。
②	せつ明文の内ようを読み取る	情報と情報との関係について理解し、中心となる語や文を見付けて要約している。	説明文ではキーワードをしっかりと押さえて、要約する経験を繰り返しさせていく。

3年(令和6年度4年)【算数】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○図形は目標値を3.1ポイント上回っており、図形の基礎基本は身に付けている。 ●数と計算は目標値を3ポイント下回っており、特に、わり算が5.9ポイント下回っており、課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	かけ算九九を間違えたり、わり算の計算でひき算をする際の計算ミスに気付かなかったりする児童が多く、基礎・基本が定着していない。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
算数科の重点目標	既習の知識をもとにして、問題を解く技能の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	かけ算	3けた×1けた＝4けたの計算ができる。	2けた×1けた＝3けたの計算から授業内で解き、計算の手順を理解させていく。
②	わり算	2けた÷1けた＝1けた(あまりなし)の計算ができる。	2けた÷1けた＝1けた(あまりなし、あまりあり)を授業内で解き、手順を理解させていく。

評価について

△	目標値を上回る
≒	目標値と同程度
▼	目標値を下回る

※目標値とは、学習指導要領に示された内容について、「出題形式」や「解答形式」の特性をもとに、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合を示したものです。

4年(令和6年度5年)【国語】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○活用は、目標値を2.7ポイント上回っており、物語の内容を読み取る力がついている。 ●書くことは、目標値を8.1ポイント下回っており、課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	条件(文字数、段落数など)の中で文章を書く経験が乏しく、書くことを諦めてしまう傾向がある。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
国語科の重点目標	既習の知識をもとにして、問題を解く技能の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	文章を書く	段落の役割について理解し、2段落構成で文章を書いている。	説明文を読む際に段落の役割、要点を丁寧に指導すると共に、書く活動でも意識させる。
②	調べて分かったことを発表する。	情報と情報との関係について理解し、理由や事例などを挙げながら話している。	日頃の授業等から、自分の意見の理由を述べさせたり、「たとえば～」と事例を挙げる良さについて指導したりする。

4年(令和6年度5年)【算数】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○基礎は目標値を0.1ポイント上回っており、特に図形がよくできていた。 ●思考・判断・表現は、目標値を4.8ポイン下回っており、特に、折れ線グラフに課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	既習事項が定着できておらず、解き方を言葉で説明する機会が不足していることが考えられる。
	主体的に学習に取り組む態度	▼	
算数科の重点目標	資料等を用いて、自分の考えが伝わるように発表・表現する力の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	折れ線グラフ	折れ線グラフを正しく読み取っている。	算数だけでなく、他教科においても、複数の資料(グラフや図表)から何がわかるのかを読み取る機会を設ける。
②	小数	小数を用いて重さの単位換算ができる。	「K , m」といった接頭語の意味を繰り返し指導し、使う機会を増やす。

評価について

△	目標値を上回る
≒	目標値と同程度
▼	目標値を下回る

※目標値とは、学習指導要領に示された内容について、「出題形式」や「解答形式」の特性をもとに、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合を示したものです。

5年(令和6年度6年)【国語】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		△	○基礎、活用ともに目標値を6ポイント以上上回っており、基本的な学力が定着している。 ●特に大きな課題はないが、文章を書く力や修飾語に少し課題が見られた。
基礎・活用	基礎	△	
	活用	△	
観点	知識・技能	△	要因分析
	思考・判断・表現	△	条件(文字数、段落数など)の中で文章を書く経験が乏しい。
	主体的に学習に取り組む態度	△	
国語科の重点目標	既習の知識をもとにして、問題を解く技能の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	文章を書く	指定された長さで文章を書いている。	気になるニュースの感想などを指定の文字数や行数で書かせたり、季節に合わせて「100マス」作文などを書かせたりする。
②	言葉の学習	連用修飾語について理解している。	意味調べや読書・文の例示やヒントを付け、学習しやすい場の工夫をしたり、日記を詳しく書く習慣を身に付けさせたりする。

5年(令和6年度6年)【算数】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≡	○基礎は目標値を1.8ポイント上回っており、知識・技能が定着している。 ●変化と関係は目標値を2.6ポイント下回っており、体積は4ポイント下回っており、課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≡	
	活用	≡	
観点	知識・技能	≡	要因分析
	思考・判断・表現	≡	生活体験と問題との繋がりを捉えられておらず、経験等を踏まえて答えに対する見当を付ける技能が身に付いていない。
	主体的に学習に取り組む態度	≡	
算数科の重点目標	既習の知識をもとにして、問題を解く技能の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	体積	立方体の体積を求める式を理解している。	具体物を使用して、公式の意味を理解させたり、デジタルドリルを活用して、類似問題に取り組ませたりする。
②	単位量あたりの大きさ、比例	単位量あたりの大きさから、大人の人数を求めることができる。	数直線を描き、分かっていること、聞かれていることを理解させたり、デジタルドリルを活用し、公式の意味を理解させたりする。

△	目標値を上回る
≡	目標値と同程度
▼	目標値を下回る

※目標値とは、学習指導要領に示された内容について、「出題形式」や「解答形式」の特性をもとに、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合を示したものです。

6年(令和6年度中学校1年)【国語】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○基礎、活用ともに、目標値を1ポイント程度上回っており、「話すこと・聞くこと」がよくできていた。 ●「書くこと」は、目標値を4ポイント下回っており、課題が見られる。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	学力の個人差が大きく開いてしまっていて、低位の児童が主体的に取り組むことが難しくなっている。個に応じた指導が十分にできていない。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
国語科の重点目標	既習の知識をもとにして、問題を解く技能の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	言葉の学習	三字の熟語の成り立ちについて理解している。	熟語を用いた文章作りを繰り返して、語彙を豊かにさせる。
②	文章を書く	段落の役割について理解し、2段落構成で文章を書いている。	条件(文字数、段落数など)の中で文章を書く経験を繰り返させる。

6年(令和6年度中学校1年)【算数】

項目		評価	考察(○成果 ●課題)
教科全体		≒	○思考・判断・表現は目標値を1.5ポイント上回っており、活用する力が身に付いている。 ●変化と関係は目標値を7.7ポイント下回っており、特に、比と比の値に課題が見られた。
基礎・活用	基礎	≒	
	活用	≒	
観点	知識・技能	≒	要因分析
	思考・判断・表現	≒	基本的な計算方法は理解しているが、仕組みが分かっておらず、説明することができない。
	主体的に学習に取り組む態度	≒	
算数科の重点目標	自分の考えについて、理由を言葉や数を用いて記述する力の育成		
重点的に取り組む学習内容			
課題	問題内容	出題のねらい	課題に対する手立て
①	比と比の値	等しい比について理解している。	生活と関連付けて、比の有用性を感じさせる問題に繰り返し取り組ませる。
②	分数のかけ算・わり算	分数のわり算を、被除数と除数に同じ数をかけて、整数のわり算にして計算する方法を説明している。	説明する活動で適時モデリングを行い、説明に自信がもてるように取り組ませる。

評価について

△	目標値を上回る
≒	目標値と同程度
▼	目標値を下回る

※目標値とは、学習指導要領に示された内容について、「出題形式」や「解答形式」の特性をもとに、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合を示したものです。

(2) 全国学力・学習状況調査(令和6年4月実施)

国語

考察(問題と結果の分析)

- ・全体の平均正答率は、全国(+5.3ポイント)や県(+4ポイント)を上回っている。
- ・ほぼ全ての問題で全国や県を上回っている。県の正答率を下回った問いは1問で「人物像を具体的に想像することができるか」であり、正答率が6割を下回ったのは、「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができること」についてで、それらにやや課題が見られた。
- ・文章から選び出す問題はできている一方で、文章を読み取る問題が苦手である。また、選択問題であっても未回答の児童がいた。

課題の要因分析

- ・説明文で、資料を読み取って自分の考えをまとめる経験が不十分であったことが考えられる。また、意見文を書く際に、資料を選択して自分の考えを表現する経験が不足していたことが考えられる。
- ・物語を読む習慣ができていなかったり、読む本のジャンルが偏ったりしているため、想像しながら文章を読み進める活動に慣れていないことが考えられる。
- ・未回答については、問題に粘り強く取り組み、一番近い考えを選び取るなど、テスト形式の問題に触れる経験が足りないことが考えられる。

算数

考察(問題と結果の分析)

- ・全体の平均正答率は、全国(+4.6ポイント)や県(+4ポイント)を上回っている。
- ・学習指導要領の領域では、全て国・県の平均を上回った。その中で課題は、正答率が5割に満たなかった「道のりが等しい場合の速さについて時間を元に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる」や「球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係をとらえ、立方体の体積の求め方を式に表すことができる」であった。
- ・立式の理由を言葉や数を用いて記述することや必要な情報を読み取って条件に合わせて、式に表現することに課題がある。

課題の要因分析

- ・出された問題に対して、求められていることの意味や条件を正しく理解し、必要な情報を読み取る力が不足しているのは、複雑な適用問題に触れる経験が少なかったことが考えられる。また、自分の考えを表現する力が不足していたのは、個人差が大きくなったことで、下位の児童が上位の児童の意見を聞くことが多くなり、下位の児童が表現する場が少なくなっていたことが考えられる。
- ・小グループで話し合う活動を通じて、自分の考えを論理的に伝える機会が不足していることが考えられる。

(3)埼玉県学力・学習状況調査(令和6年4、5月実施)

※主な参考資料 帳票09、40

国語

学年	学力レベル				学習方略						非認知能力	
	R6レベル	昨年度からの伸び(+or-)	R5レベル		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感		
4年	校内	5-B			R6数値	4.0	4.0	3.8	4.3	4.0	4.1	
	県	5-B			伸び +or-							
	1 考察(「学力レベルの伸び」と「学習方略・非認知能力」の関係性を分析(学力レベルは県との比較も参考にする)) ・学習方略、非認知能力は、県平均を上回っていることから、意欲的に学習に取り組む児童が多いと考えられる。 作業方略については課題が見られたので、大切なところを繰り返し書くなどして基礎基本を定着させていきたい。 ・学力レベルは、県や市同等であるが、平均正答率を見ると、全体的に下回っている。 ・「教科の領域」において「情報の扱い方、我が国の言語文化」、「問題形式」において「短答式」が下回っている。											
	2 成果と今後の取組(1の考察結果を踏まえること。また、帳票09の「問題の概要」「出題の趣旨」「評価の観点」等も参考にする) ・帳票09より、文章の構成や指示語の役割の理解に課題があることがわかったので、基礎基本に立ち返り、音読や読書を通して、言葉や漢字の意味に親しむ機会を増やす。 ・読むこと以外は、全て県・市の平均を下回った結果から、基礎基本が定着するような指導を続けていく必要がある。 ・国語辞典の使い方の指導や、必要に応じて、意図的に活用する場面を増やす。 ・振り返りを活用して、本時の学習や活用について考える時間を設ける。											
学年	学力レベル				学習方略						非認知能力	
	R6レベル	昨年度からの伸び(+or-)	R5レベル		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	自制心	
5年	校内	6-A	1	6-B	R6数値	3.9	3.9	3.7	4.3	4.1	3.9	4.1
	県	6-B	1	6-C	伸び +or-	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.3
	1 考察(「学力レベルの伸び」と「学習方略・非認知能力」の関係性を分析(学力レベルは県との比較も参考にする)) ・学習レベルは、昨年度よりも1段階上昇し、県を上回っている。 ・学習方略と非認知能力については、県より全て高いレベルで、全体的に昨年度よりも向上している。 ・努力調整方略は、前年度からみると「-0.4」であった。問題が難しくなり、諦めずに最後まで継続して学習することが難しくなっている。 ・物語文の登場人物の心情とその対象を理解することがよくできている。また、漢字辞典の使い方でもよく理解している。 ・時間配分が上手いかず、最終問題の無回答率が高い。 ・被修飾語や類義語・対義語、多義語などの言葉の意味を理解して解く文法問題が課題である。 ・インタビューのメモの取り方、話を聞く能力が低い。											
	2 成果と今後の取組(1の考察結果を踏まえること。また、帳票09の「問題の概要」「出題の趣旨」「評価の観点」等も参考にする) ・物語文の読み取りの精度をより上げるために、主語と述語の関係を意識して読み取りをさせたり、言葉の意味理解を深めるため、辞書引きを授業内で行わせ、語彙を広げたりしていく。また、作文を書かせ、主語述語を正しく書けるようにすることが必要である。 ・粘り強く問題に取り組む、答えを導き出す経験を積ませるために、基礎的な問題だけでなく発展的な課題にも適時取り組ませていく。											
学年	学力レベル				学習方略						非認知能力	
	R6レベル	昨年度からの伸び(+or-)	R5レベル		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	やりぬく力	
6年	校内	7-B	0	7-B	R6数値	3.9	3.9	3.6	4.3	4.1	3.8	3.2
	県	7-C	0	7-C	伸び +or-	0.3	0.2	0.2	0.3	-0.1	0.1	-0.1
	1 考察(「学力レベルの伸び」と「学習方略・非認知能力」の関係性を分析(学力レベルは県との比較も参考にする)) ・学習レベルは、県よりも1段階上回っている。 ・学習方略と非認知能力については、県より全て高いレベルで、全体的に昨年度よりも向上している。しかし、努力調整方略は、マイナスとなっており、学年が上がり、粘り強く最後まで解くことが難しくなっている。 ・多義語について異なる意味を理解することに課題がある。 ・登場人物の言動を通して考え方を読み取ることに課題である。											
	2 成果と今後の取組(1の考察結果を踏まえること。また、帳票09の「問題の概要」「出題の趣旨」「評価の観点」等も参考にする) ・努力調整方略が伸びていくように、子供たちが自分の考えを表現をし、ねばり強く取り組みやすくなるように、協働的な学習の時間を増やす。 ・多義語の理解を進めたり、登場人物の言動を通して考えを読み取る力を高めるために、読書する習慣を推進していく。 ・粘り強く最後まで解く力を高めるために、発展的な内容を自主学習で取り組む内容に組み込んでいく。											

(3)埼玉県学力・学習状況調査(令和6年4、5月実施)

※主な参考資料 帳票09、40

算数

学年	学力レベル				学習方略						非認知能力	
	R6レベル	昨年度からの伸び(+or-)	R5レベル		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感		
4年	校内	4-B			R6数値	4.0	4.0	3.8	4.3	4.0	4.1	
	県	4-A			伸び +or-							
	1 考察(「学力レベルの伸び」と「学習方略・非認知能力」の関係性を分析(学力レベルは県との比較も参考にする)) ・学力レベルは県と比べて1段階下回っている。 ・学習方略や非認知能力は市・県平均よりも高い。 ・ノートに板書を書いたり、友達と学び合ったりと学習効果を高めるための活動を得意としているが、その方策が学力にはなかなか結び付いていない。 ・無回答率が低く、問題に取り組むことはできているが正答へと辿り着いていない。答えを選択する問題よりも自分で導き出す問題に課題が見られるため、認知的方略をより伸ばしていくことができるとよい。 ・グラフの読み取りが特に課題であり、平均よりも14ポイント低い結果となっていた。											
	2 成果と今後の取組(1の考察結果を踏まえること。また、帳票09の「問題の概要」「出題の趣旨」「評価の観点」等も参考にする) ・学習方略の数値の高さが学力につながるように、児童同士の学び合いを継続して重視し、考えを説明する活動を通して学力を高めていく。 ・帳票09より、「知識・技能」、「思考・判断・表現」とともに県や市の平均を下回っている。基礎学力の向上を図る必要があるため、自主学習などでも学習した内容を自分の言葉で再度理解し直す取組を指導していく。デジタルドリル等も活用して個々に応じた十分な復習の機会を与えることも合わせて行っていく。											
学年	学力レベル				学習方略						非認知能力	
	R6レベル	昨年度からの伸び(+or-)	R5レベル		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	自制心	
5年	校内	5-A	1	5-B	R6数値	3.9	3.9	3.7	4.3	1.0	3.9	4.1
	県	5-B	1	5-C	伸び +or-	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.3
	1 考察(「学力レベルの伸び」と「学習方略・非認知能力」の関係性を分析(学力レベルは県との比較も参考にする)) ・学力レベルは昨年度から1伸び、県を上回っている。 ・学習方略、非認知能力ともに昨年度からの伸びは少ないが、県平均を上回っている。 ・ほとんどの設問で、無回答率が県平均を下回っており、このことから学習方略の高さがうかがえる。 ・ほとんどの設問で、見直し回数と時間が県平均を下回っていることから、一度問いた問題を見直すことが習慣化されていない。											
	2 成果と今後の取組(1の考察結果を踏まえること。また、帳票09の「問題の概要」「出題の趣旨」「評価の観点」等も参考にする) ・デジタルドリル学習などで繰り返し学習することが成果につながっていると考えられる。しかし「数と計算」の領域で正答率が低く、基礎的な問題でも、見方を変えた設問が出ると解くことできない傾向がある。授業内での学習やデジタルドリル学習を通して基礎基本の習得を徹底していく必要がある。 ・見直しをすることが習慣化されていないことで回答していても正答へと辿り着いていない児童がいるため、日頃から問題を解いた後に丁寧に見直しをするよう指導していく。											
学年	学力レベル				学習方略						非認知能力	
	R6レベル	昨年度からの伸び(+or-)	R5レベル		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	やりぬく力	
6年	校内	6-B	0	6-B	R6数値	3.9	3.9	3.6	4.3	4.1	3.8	3.2
	県	6-B	1	6-C	伸び +or-	0.3	0.2	0.2	0.3	-0.1	0.1	-0.1
	1 考察(「学力レベルの伸び」と「学習方略・非認知能力」の関係性を分析(学力レベルは県との比較も参考にする)) ・学力レベルは昨年度と変わらず、県と同等である。 ・学習方略、非認知能力ともに伸びが大きく、県平均を上回っている。ただ、努力調整方略ややり抜く力がマイナスであることから、簡単に解けないと感じている問題に対しては、ねばり強く取り組むことが難しくなっている。 ・記述式の問題が県平均よりも下回っていることから、問題の趣旨を押さえることが課題である。 ・記述式の問題での無回答率が高いことから、問題に対する粘り強さが付いていない。 ・問題番号が下になるにつれて、回答率が下がっているため、時間配分ができていない。 ・公式などは理解に差が大きく、学習を系統的に考えることができず、既習事項を応用することに課題がある。											
	2 成果と今後の取組(1の考察結果を踏まえること。また、帳票09の「問題の概要」「出題の趣旨」「評価の観点」等も参考にする) ・計算問題はできている児童が多いが、記述問題に課題があるため、日頃の授業から問題や式、答えの理由を説明させたり、書かせたりする活動を取り入れる。 ・自力解決の時間を多く設定し、粘り強く取り組む時間を確保していく。 ・単元の最初に既習事項を振り返り、どのような学習に活用できるのか取り上げ、取り組みやすい環境づくりをする。 ・持っている知識を活用できるように、学び方を工夫する必要がある。そのために自力解決が個に応じて進められるように個人で取り組むだけでなく、初めから友達と協力して進めたり先生に聞いたりするなどの協働学習を組み込み、課題解決の手立てを児童が選べるように工夫していく。											

2 学力向上を図る取組

(1) 各教科の授業における取組（低学年）

本校で身に付けさせる学力

知識及び技能の習得	思考力・判断力・表現力等の育成	学びに向かう力・人間性等の涵養
①漢字や計算などの各教科における基礎的な知識。 ②既習の知識をもとにして、問題を解く技能。	③自分の考えについて、理由を言葉や数を用いて記述する力。 ④資料等を用いて、自分の考えが伝わるように発表・表現する力。	⑤自己効力感（自分への自信、自己肯定感）。 ⑥児童が自ら進んで学習に取り組んでいく素地。



教科・領域	重点的に身に付けさせる学力	具体的な取組	成果
国語	①、④	①書かれている事柄の順序を整理しながら、文章を読む指導をする。 ④登場人物の気持ちを読み取り、音読の仕方を工夫させる。 ④自分が経験したことを、順序に気を付けながら話ができるようにする。	
算数	①、③、⑥	①具体物を用いた活動を通して、数についての感覚や長さなど量の大きさについての感覚を豊かにする。 ③児童の「なぜ」「どうして」が生まれるような切り返しの発問をしていくことで、思考を深められるようにする。 ⑥導入において、生活経験や既習経験、興味関心、問題意識、知的好奇心を高める発問をする。	
生活	①、④、⑥	①見付ける、比べる、たとえば、試す、見通す、工夫するなどの多様な学習活動を取り入れる。 ④言葉や記録カードなどによって表現する機会を設け、気持ちを伝え合い交流する場を工夫する。 ⑥身近な生き物や植物との関わりが深められるよう飼育、栽培を積極的に取り入れる。 ⑥児童が身近な人々、社会及び自然と直接関わる活動や体験を充実できるように校外での活動を取り入れる。	
音楽	③、⑥	③音楽を形づくっている要素をもとに、曲や演奏の良さを感じ取ることができるようにする。 ⑥音楽に合わせて体を動かしたり、リズム打ちをしたりして、友達と気持ちを合わせて演奏する楽しさを感じられるようにする。	

図画工作	①、④、⑥	①表現と鑑賞を相互に関係させて資質・能力を育成できるよう、造形活動と鑑賞活動とが往還するような学習過程を設定する。 ④材料コーナーや道具コーナーを設け、児童の発想をもとに表現を工夫できるような場づくりをする。 ⑥題材における発想のきっかけを明確にし、児童の「表したい」を引き出す導入を工夫する。	
体育	①、④	①各領域の運動における技能の基礎・基本を明確にし、そのための多様な動きを経験できる場を設定し、力いっぱい運動させる。 ④児童に多くの声をかけることで言葉かけの例を示し、児童同士で交流が図れるようにする。	
英語活動	①、④	①英語を用いた体験的な活動を通じて、言語やその背景にある文化の多様性を尊重し、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。 ④英語を通じて、身近で簡単なことについて聞いたり話したりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力・英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の素地を養う。	
特別の教科 道徳	⑤、⑥	⑤よいと思ったことができたときのすがすがしい気持ちを思い起こさせる。 ⑥身近な事例を踏まえ、人として、してはならないことは行ってはいけないという一貫した方針をもち、毅然とした態度で指導していく。 ⑥児童が問題意識をもち、意欲的に考え、主体的に話し合えることができるよう、ねらい、児童の実態、教材や学習指導過程などに応じて、発問、話し合い、書く活動、表現活動などを工夫する。	

A・・・取組の効果が十分に見られた B・・・今後も課題として取り組む C・・・取組を見直す

2 学力向上を図る取組

(1) 各教科の授業における取組（中学年）

本校で身に付けさせる学力

知識及び技能の習得	思考力・判断力・表現力等の育成	学びに向かう力・人間性等の涵養
①漢字や計算などの各教科における基礎的な知識。 ②既習の知識をもとにして、問題を解く技能。	③自分の考えについて、理由を言葉や数を用いて記述する力。 ④資料等を用いて、自分の考えが伝わるように発表・表現する力。	⑤自己効力感（自分への自信、自己肯定感）。 ⑥児童が自ら進んで学習に取り組んでいく素地。



教科・領域	重点的に身に付けさせる学力	具体的な取組	成果
国語	①、②、④	①辞書を活用する機会を増やし、語彙力を高める。 ②中心となる語や文を捉えながら文章を読む指導をする。 ④自分の思いや考えを話す機会を設け、事実と自分の考えを明確にしながら話ができるようにする。	
社会	①、③、④、⑥	①地域ごとの特色、地図記号の意味を理解させるために、地図帳や教材・教具を活用した取組を行う。 ③自分の考えを書いたり、話したりする機会を増やす。 ④自分たちが地域とどう関わっていくべきなのか考えさせ、表現する機会を増やす。 ⑥都道府県の関心を高めるため、地図帳を活用する。 ⑥ICT機器を活用した授業の工夫に取り組み、関心・意欲を高めさせる。	
算数	①、②、⑤	①具体物を用いた活動を通して、長さや重さなど量の把握に対する感覚を豊かにする。 ②言葉や式、数直線など多様な表現方法で数量関係を捉え、既習事項を活用して課題解決ができるようにする。 ⑤適用問題、振り返りの時間の充実を図る。	
理科	①、③、④、⑥	①観察活動を通して、実物にふれる機会を増やす。 ③課題に対して予想を立てさせ、自分の考えを根拠に基づいて説明できるようにさせる。 ④結果を話し合ったりまとめたり考えを発表したりさせる。 ⑥動物や植物、太陽の様子、体のつくりや空気、水、金属など、身近に見られる事象や変化に対する疑問をもたせ児童の関心を高める。	

音楽	①、③、⑥	①リコーダーの運指や音色作り、発声など基本を定着させる。 ③音楽を形づくっている要素をもとに、曲や演奏のよさを感じ取ることができるようにする。 ⑥歌詞の意味を考えたり、曲の特徴を感じ取らせたりすることで教材の魅力を充分に感じ取り、すすんで音楽活動を行えるようにする。	
図画工作	①、④、⑥	①用具、道具の使用に関する安全指導の徹底を図る。 ④作品や表現のよさや面白さを伝え合う活動を重視し、鑑賞と表現が一体となった学習を展開する。 ⑥導入において、材料や技法の可能性を広げるような出せ方を工夫し、児童の柔軟な発想を引き出す。 ⑥様々な身近材料を用意し、自由に使える環境をつくることで、児童の発想を広げる。	
体育	①、④、⑤	①各領域の運動における技能の基礎・基本を明確にし、動きを高めさせる場を設定し、全力で運動する機会を多くする。 ④児童に多くの声をかけることで言葉かけの例を示し、小グループの活用を積極的に行うことで児童同士の交流が図れるようにする。 ⑤できる喜びを感じ、粘り強く取り組む児童を育成していくために、スモールステップを設定した単元計画を作成する。	
外国語活動	①、④、⑥	①言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語の音声や語順等の違いに気付いた上で、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるようにする。 ④外国語を通じて、身近で簡単なことについて、聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。 ⑥外国語を通じて、言語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	
特別の教科 道徳	④、⑤、⑥	④自分と他者との考えを比べ、考えを深める展開となるように工夫する。 ⑤教材を自分との関わりでとらえ自己を見つめ直し、発展させていくことへの希望がもてるような終末となるように工夫する。 ⑥教材に対する興味や関心を高める導入を工夫する。	

A・・・取組の効果が十分に見られた B・・・今後も課題として取り組む C・・・取組を見直す

2 学力向上を図る取組

(1) 各教科の授業における取組（高学年）

本校で身に付けさせる学力

知識及び技能の習得	思考力・判断力・表現力等の育成	学びに向かう力・人間性等の涵養
①漢字や計算などの各教科における基礎的な知識。 ②既習の知識をもとにして、問題を解く技能。	③自分の考えについて、理由を言葉や数を用いて記述する力。 ④資料等を用いて、自分の考えが伝わるように発表・表現する力。	⑤自己効力感（自分への自信、自己肯定感）。 ⑥児童が自ら進んで学習に取り組んでいく素地。



教科・領域	重点的に身に付けさせる学力	具体的な取組	成果
国語	③、④	③考えをまとめる際には、短い言葉で端的にまとめる活動に繰り返し取り組ませる。 ④新聞記事の紹介やお勧めの本など、事実を基に自分の意見を伝える機会を設け、根拠を分かりやすく伝えさせる。 ④登場人物の相互関係や心情を描写を基に捉え自分の生き方や考えについて友達と交流することで意見を深める。	
社会	①、②、③、⑥	①資料集や地図帳を活用し、理解を定着させる。 ②資料を活用して、情報を多角的に読み取り整理させる。 ②時代ごとに特徴を捉えさせ、比較を通して時代の変化を考えさせるようにする。 ③読み取った情報から、土地の様子や環境と国民生活との関連について自分の考えをもたせる。 ⑥政治について関心を持たせるために、ニュースを取り上げたり、新聞を活用したりする。 ⑥ICT機器を活用した授業の工夫に取り組み、関心・意欲を高めさせる。	
算数	③、④、⑤	③言葉や式、数直線などの表現で数量関係を捉え、言葉と図と数式を互いに置き換えることができるようにする。 ④小グループで話し合う活動を通じて、自分の考えを伝える機会を増やす。 ⑤適用問題、振り返りに取り組む時間の充実を図る。	

理科	③、④、⑥	③観察・実験の結果から、分かったことや身の回りに見られる関連性など自分の考えを考察としてまとめさせる。 ④課題に対して予想を立てさせ、自分の考えを、根拠に基づいて説明できるようにさせる。 ⑥物の溶け方や振り子の運動、電磁石の働き、月の満ち欠けや燃焼、空気の組成など、生活の中で活用されている場面と関連付けて関心を高める。 ⑥実験の詳細や計画など、調べたいことや目的に応じて、自分たちで条件設定を考えさせる。	
音楽	②、④、⑥	②互いの歌声や音色をじっくりと聴き合い、表現の良さを判断できるようにする。 ④音楽を形づくっている要素をもとに、曲のよさを感じ取り、作詞者、作曲者の思いにまで目を向けさせる。 ⑥歌詞の意味を考えたり、音楽の構造・構成などの特徴を感じ取ったりすることで、教材の魅力を十分に味わいながら音楽活動を行えるようにする。	
図画工作	④、⑥	④作品に込められた思いを伝え合う活動を重視し、鑑賞と表現が一体となった学習を展開する。 ⑥導入において、材料や技法の可能性を広げるような出合わせ方を工夫し、児童の柔軟な発想を引き出す。 ⑥様々な身近材料を用意し、自由に使える環境をつくることで、児童の発想を広げる。	
家庭	①、④、⑥	①体に必要な栄養素や調理器具の安全で衛生的な取扱い方を児童によく分かる場所に掲示し、その都度意識させるようにする。 ④小グループの活動では、お互いの作った物を見せ合いながら意見を交換させるようにする。 ⑥自分の生活や自分の家族の生活から問題を見いだして、課題を設定することで、自ら進んで学習に取り組めるようにする。	
体育	①、④、⑤	①各領域の運動における技能の基礎・基本を明確にし、動きを高めさせる場を設定し、全力で運動する機会を多くする。 ④小グループの活用を行い、児童が感じたことや友達へのアドバイスなどを伝え合う場を設ける。 ⑤できる喜びを感じ、粘り強く取り組む児童を育成していくために、スモールステップを設定した単元計画を作成する。	

外国語科	①、④、⑥	①外国語を通じて、言語の働きや役割などを理解し、読んだり書いたりして外国語の文字、単語、語順などに慣れ親しませるとともに、外国語の音声、語彙・表現を聞いたり話したりする実際のコミュニケーションの場面において活用できる基本的な技能を身に付けられるように、スパイラルの学習を意識して、既習事項を適時振り返りながら授業を行う。 ④外国語を通じて、身近で簡単なことについて、文字、単語などを読んだり語順に気付きながら書いたりするとともに、聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う授業を行う。 ⑥外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする導入や展開の授業を行う。	検討中
特別の教科 道徳	③、④、⑥	③道徳的諸価値に関わる様々な課題について議論を行い自分との関わりで考えることができるように工夫をする。 ④教材や体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、話し合いなどにより異なる考えに接し、多面的・多角的に考え、協同的に議論したりするなどの工夫をする。 ⑥自分の意志で考え判断し行動しなければならない場面やその後の影響を考えることなどを通して、多面的・多角的に理解できるようにする。	

A・・・取組の効果が十分に見られた B・・・今後も課題として取り組む C・・・取組を見直す

(2) 教育活動全体を通じた取組

本校の特色ある取組	
○数学的な見方・考え方を働かせる授業展開	・数学的な見方・考え方を視点に学習を振り返ることで、達成感や充実感を養い、自己効力感を高める。 ・児童一人ひとりに応じた学習活動を設定し、「わかった」「できた」を実感させる。 ・学習形態を工夫し、児童同士で協働しながら学習に取り組めるようにする。

○児童が計画・運営する活動「集会活動」	・教師の適切な指導のもと、児童が計画・運営しながら楽しく充実した学校生活を推進する。(委員会集会、プール開き集会、英語集会等)
○児童相互の交流を深め、豊かな心を育む活動「たてわり班活動」	・市内で最も児童数が多いという特長を生かして、児童の多様な人間関係作り（異学年で活動する場を通して、他者や年下の児童への思いやりのある心を育てる。）を推進する。
○多様な集団活動を通して、支え合い、高め合う「児童会・クラブ活動」	・協働して取り組み、異年齢集団における人間関係をよりよく形成できるようにする。

家庭教育との連携

○主体的な家庭学習「チャレンジ学習」「デジタルドリル」の活用	・「チャレンジノート」という家庭学習用ノートを活用し、家庭学習の習慣化に取り組む。興味・関心の高いことから始めて、少しずつでも毎日取り組むことを重視し、児童が進んで学習に取り組むための基礎作りとする。また、デジタルドリルを2年生以上で導入し、個別最適な学習を進めていく。
○家庭や地域への情報発信	・学校便りをはじめとした従来の紙面での情報発信だけでなく、学校ホームページの活用やさくら連絡網によるリアルタイムな情報の配信をする。
○学校応援団の充実した活用	・体験活動、校外行事の引率・安全確保、学習補助、環境美化などのボランティア活動を通して、学校と家庭、地域が連携して児童を育成する。 ・生活科や総合的な学習の時間等、地域の教育力を生かした授業づくりを行う。
○近隣の幼稚園、保育園、小中学校との連携	・定期的に行う研修会や授業参観会等を通して大石中学校や大石北小学校と連携を図り、小中一貫教育に向けた取組を推進する。 ・学校公開や生活科の学習を通して幼稚園、保育園との連携を図り、小学校入学に向けた心身の準備ができるように情報提供等を行う。